

介助者を複数にすることにより

在宅血液透析(HHD)へ移行し得た一例

長崎腎クリニック 長崎腎病院

○永野かおり 田中恵 田中健 丸山祐子 橋口純一郎 船越哲

【目的】

HHD を実施するには介助者の存在が不可欠である。今回、主となる介助者の他にサポートとして複数設定し、介助者の精神的負担を軽減することで HHD へ移行する事ができた一例を報告する。

【症例・経過】

58 歳女性、透析歴 18 年。骨痛による長時間の同姿勢保持困難と自由な時間が持たないと HHD を希望。介助者は夫であったが、仕事が多忙で HHD 移行は困難と思われた。しかし、当初反対していた娘達も両親の強い思いに共感し HHD に同意した為、介助者 3 名への教育指導を開始した。講義は介助者 3 名が同時に来院できる時に実施。実技は個別に行いカンファレンスで進捗状況を共有した。移行日が近づくと不安が多く聞かれ、家族間の心理的な調整の必要性が判明した。その都度傾聴し、家族間で協議し解決していった。最終的に娘からは「一人じゃないから安心」という言葉も聞かれ HHD 導入に至った。

【考察】

HHD は患者のライフスタイルに合わせて行える治療法であるが、介助者が拘束されることは切実な問題である。今回の事例を通し、介助者を複数確保する事でそれぞれの精神的負担が減り、安心感や連帯感が HHD 移行に繋がったと考える。一方で家族間の関係性も関わってくる為十分なケアと傾聴が重要である事を再認識した。

【結論】

HHD への移行と継続において、介助者を複数設定することは有用である。